

日本消化器外科学会編集後記

2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震に続いて起こった東京電力福島第一原子力発電所の事故発生以来9か月が過ぎ去ろうとしています。この間、全国の皆さまから、医療活動、被災地の復旧活動、避難所運営などの支援、義援金や物資などの提供、さらには福島県産農産物の応援など、幅広い分野で心温まる御支援をいただいております。紙面をお借りいたしまして、心より感謝と御礼を申し上げます。

過去の歴史において、戊辰の役の会津戦争は言うに及ばず、さかのぼれば、関ヶ原前夜、徳川による会津征伐の際、上杉軍は白河口を決戦の地と決めました。文治5年、奥州藤原氏が源頼朝率いる鎌倉軍と雌雄を決した阿津賀志山（国見町）の戦い、延元2年、北畠顕家が福島市霊山に城を築き義良親王（後の後村上天皇）を奉じて南朝方の拠点とするなど、各時代において、この地が国体を揺るがす事象の舞台として選ばれることに、運命的なものを感じます。

今回、我々は、新たな歴史的使命を課せられました。すなわち、この危機を克服するための努力だけでなく、この事故のすべてを記録し、次の世代に伝えていく責務、そして将来に渡って、県民や近県を含めた市民の健康管理にも責任を負わなければなりません。我々は「福島の悲劇を奇跡に」を天命として、総力戦を展開し、継続しております。

すでに、約200万人の福島県民全体を対象に健康調査を実施し、長期間にわたって放射線被曝の影響を調査いたします。特に、子供達の健康を生涯見守るため、震災時18歳以下の約36万人の甲状腺超音波検査を20歳までは2年ごと、それ以降は5年ごとに継続いたします。当初、専門家とされる先生方に、「超音波を用いた新生児・小児に対する甲状腺検査は施行が難しい」と、冷ややかなご意見をたまわりました。しかし、実際に外科医を中心に始めました検査は、2か月で5,000人を超え、順調に進捗しております。もちろん正確な結果が蓄積されております。甲状腺の専門医の数には限りがありますが、この任務の一翼を担っているのが、消化器外科医であります。元来、消化器外科医の扱う疾患は多岐にわたり、超音波を含めた幅広く高度なさまざまな技術を持っております。今回のような事態にもただちに即応できる、極めて柔軟かつ秀逸な集団です。我々は外科医の能力の高さを強調してまいりましたが、今般、消化器外科医が価値観を共有し、団結したときの実行力のすさまじさに改めて感激しております。

（竹之下 誠一）

2011年12月1日